

法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第６９回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

**話して知って**

兵庫・大野　翼

　今年の夏、ぼくは一冊の本と出会いました。「ある晴れた夏の朝」という作品です。その作品の中に、

「人を集団で『こういう人だ』と判断するのは危険だ。」

「偏見や差別は、無知から発生する。」

「人は個人として存在している。」

という言葉がありました。確かに、ぼくはこれまで「罪を犯した人」を集団で見ていて、怖い人だというイメージを持っていました。それに、犯罪そのものや、実際の罪を犯した人について、何も知らないことに気付きました。だから、少しでも犯罪や罪を犯した人について知りたいと思いました。

そこで、日々、犯罪と向き合っている警察官の方に、お話を聞きたいと思い、西宮警察署に行きました。最初に、罪を犯した人は、どういう人が多いのかを聞いてみました。そうすると、警察官の方は、もちろん怖い人はいるけれど、そういう人ばかりではないことを教えてくれました。人が罪を犯すのは、例えば振り込め詐欺の様に、他人に対する思いやりがないから人を傷つけてでも、利益を得ようとする場合が多いそうです。けれでも、交通事故の様に、ついうっかりや、知らないうちに、またはその行為が犯罪になるとは知らないで、罪を犯してしまう人もいるそうです。それぞれの犯罪の種類や、その人が犯罪に至った経緯が違うので、全ての罪を犯した人が、怖い人ではないということが分かりました。

次に、罪を犯した人やその家族は、どうなるのかを聞いてみました。よくテレビでは、罪を犯した本人やその家族が、周囲から迫害されているかの様な場面を見るので、実際はどうなのかと思ったからです。罪を犯した人が有名人の場合には、一時的にその様なことが起こる場合があるそうです。けれども普通の人の場合には、ほとんどその様なことはないそうです。また実際に罪を犯した人が、必ず刑務所に行くのではなく、裁判が終わればすぐに、社会に戻る人も多いそうです。そういう人を周りの家族が更生に向けて支えていくことが、とても大切だということも教えてくれました。

さらに、これからの未来に、ぼくが罪を犯した人と接する時に、気を付けることも聞いてみました。まずは、先入観を持たずに普通に話してみることから始めると良いそうです。そして自分にできる範囲で、しっかりと反省して更生しようとしてる人には、手助けをしてあげるのが大切だそうです。けれども中には反省せずに悪い心のままの人や、反省しているふりをしてだまそうとする人がいるので、注意が必要だとも教えてくれました。

最後に、ぼくが罪を犯さないでいるためには、どうすれば良いかを聞いてみました。すると「今の君のままで大丈夫」と言ってくれました。分からないことを素直に警察署に聞きに来ることができる正直さを持ったまま、真っ直ぐに育っていけば、きっと罪を犯す様な人にはならないだろうと言ってくれました。とても嬉しかったです。あとは、もう善悪の判断ができる年令だから、友人に誘われても悪いことだと思えば、断る勇気を持っていれば大丈夫だと、アドバイスをしてくれました。それよりも、今は犯罪に巻き込まれない様にすることを考える方が重要だと教えてくれました。特に、自転車に乗る時には、十分に周囲に注意すること。祖父母が振り込め詐欺にあわない様に、気を付けてあげることを教えてくれました。

警察署の方にお話を聞いて、罪を犯した人について知ることができました。人によって犯罪に至るまでの背景が違うこと。反省している人もいれば、そうでない人がいること。その人によって違いがあることが良く分かりました。これからは、罪を犯した人を怖い人だという先入観で判断することなく、その人自身がどういう人なのかを見ていける様になりたいです。さらに、これから出会うたくさんの人は、自分と違う人種、国籍、宗教を持つ人もいると思います。その人達を偏見の目で見ることなく、話して知って、その人個人を見ていける様な大人になっていきたいと思います。